

口永良部島の火山活動解説資料

福岡管区気象台
地域火山監視・警報センター
鹿児島地方気象台

＜噴火警戒レベルを2（火口周辺規制）から1（活火山であることに留意）に引下げ＞

口永良部島では、7月中旬頃から山体の浅いところで地震活動が活発化し、下旬には火山性地震が多い状態となりましたが、8月上旬頃に減少し、その後特段の増加は認められません。また、その他の観測データにも活動の高まりを示す変化は認められません。

これらのことから、新岳及び古岳の火口周辺に影響を及ぼす噴火が発生する可能性は低くなったと判断し、本日（28日）11時00分に噴火予報を発表し、噴火警戒レベルを2（火口周辺規制）から1（活火山であることに留意）に引き下げました。

なお、火山活動は低下していますが、山体の浅いところを震源とする火山性地震がやや多い状態で経過していますので、今後の火山情報に留意してください。

【防災上の警戒事項等】

活火山であることから、新岳及び古岳の火口内では、火山灰等が噴出する可能性があります。また、新岳西側割れ目等の地熱域では、高温の噴気や火山ガス等に注意してください。

地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

○ 活動概況

口永良部島では、7月中旬頃から山体の浅いところで地震活動が活発化し、下旬には火山性地震が多い状態となりましたが、8月上旬頃に減少し、その後特段の増加は認められません。火山性地震は主に古岳火口付近の浅いところで発生しており、新岳火口付近においても時折発生しています。振幅の大きな火山性地震は発生していません。

新岳では、7月以降白色の噴煙が最高で火口縁上500mまで上がりました。古岳では、監視カメラで火口縁を越える噴煙は観測されませんでした。

8月20日に山上で、8月及び9月に山麓で実施した現地調査では、新岳及び古岳の火口内やその周辺の地熱域の分布や温度、及び噴煙の状況に特段の変化は認められませんでした。

東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、屋久島町及び気象庁が実施した観測では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は7月以降、1日あたり10～30トンと少ない状態でした。

GNSS連続観測では、2023年11月以降、火山活動に伴う特段の変化は認められません。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページでも閲覧することができます。

https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php

資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/kazan/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土地理院、京都大学、東京大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所及び屋久島町のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』及び『電子地形図（タイル）』を使用しています。

噴火警戒レベルの判定基準表については気象庁ホームページを御覧ください。

https://www.data.jma.go.jp/vois/data/filing/level_kijunn/keikailevelkijunn.html

なお、火山活動は低下していますが、山体の浅いところを震源とする火山性地震がやや多い状態で経過していますので、今後の火山情報に留意してください。

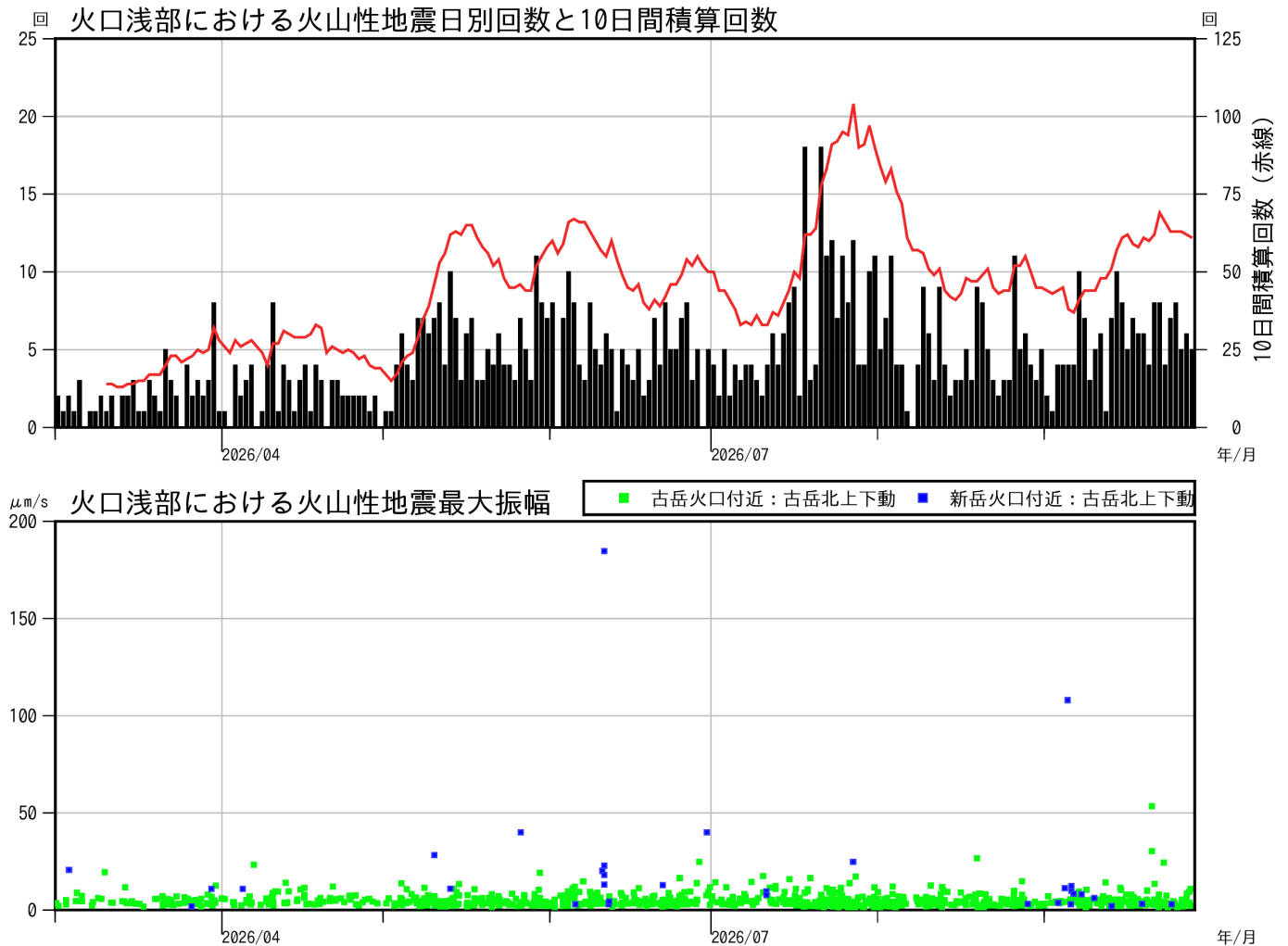


図1 口永良部島 火口浅部における火山性地震発生状況（2026年3月1日～9月28日09時までの速報値）

- ・ 7月中旬頃から山体の浅いところで地震活動が活発化し、下旬には火山性地震が多い状態となりましたが、8月上旬頃に減少し、その後特段の増加は認められません。火山性地震は主に古岳火口付近の浅いところで発生しており、新岳火口付近においても時折発生しています。
- ・ 振幅の大きな火山性地震は発生していません。

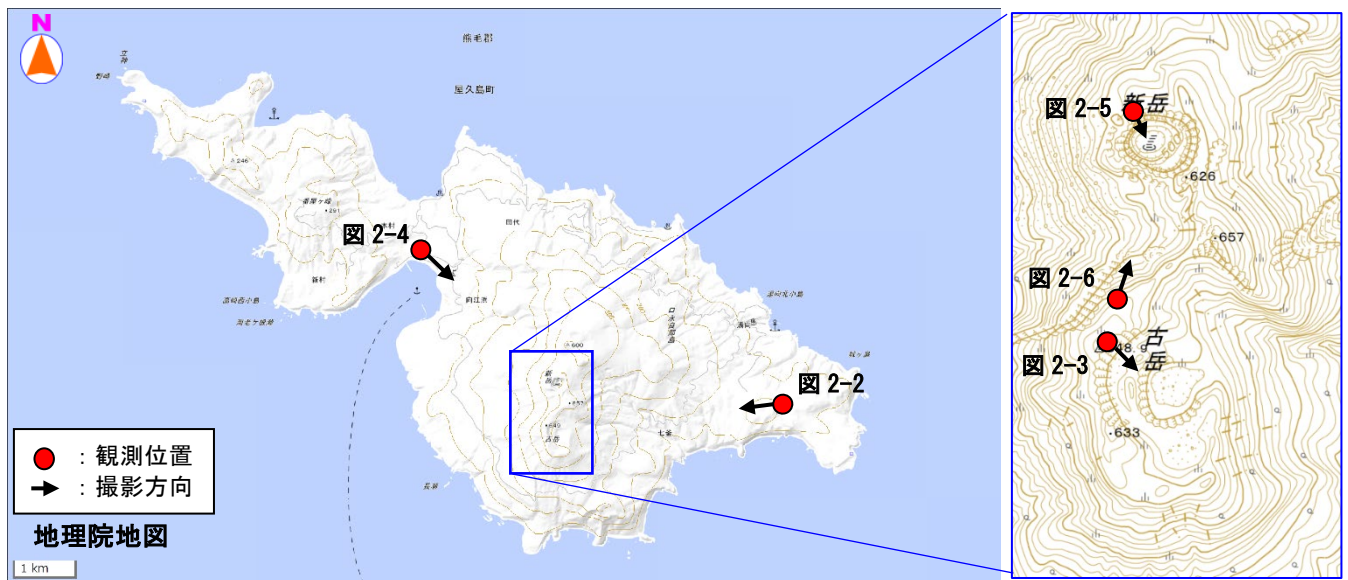


図2-1 口永良部島 観測位置及び撮影方向

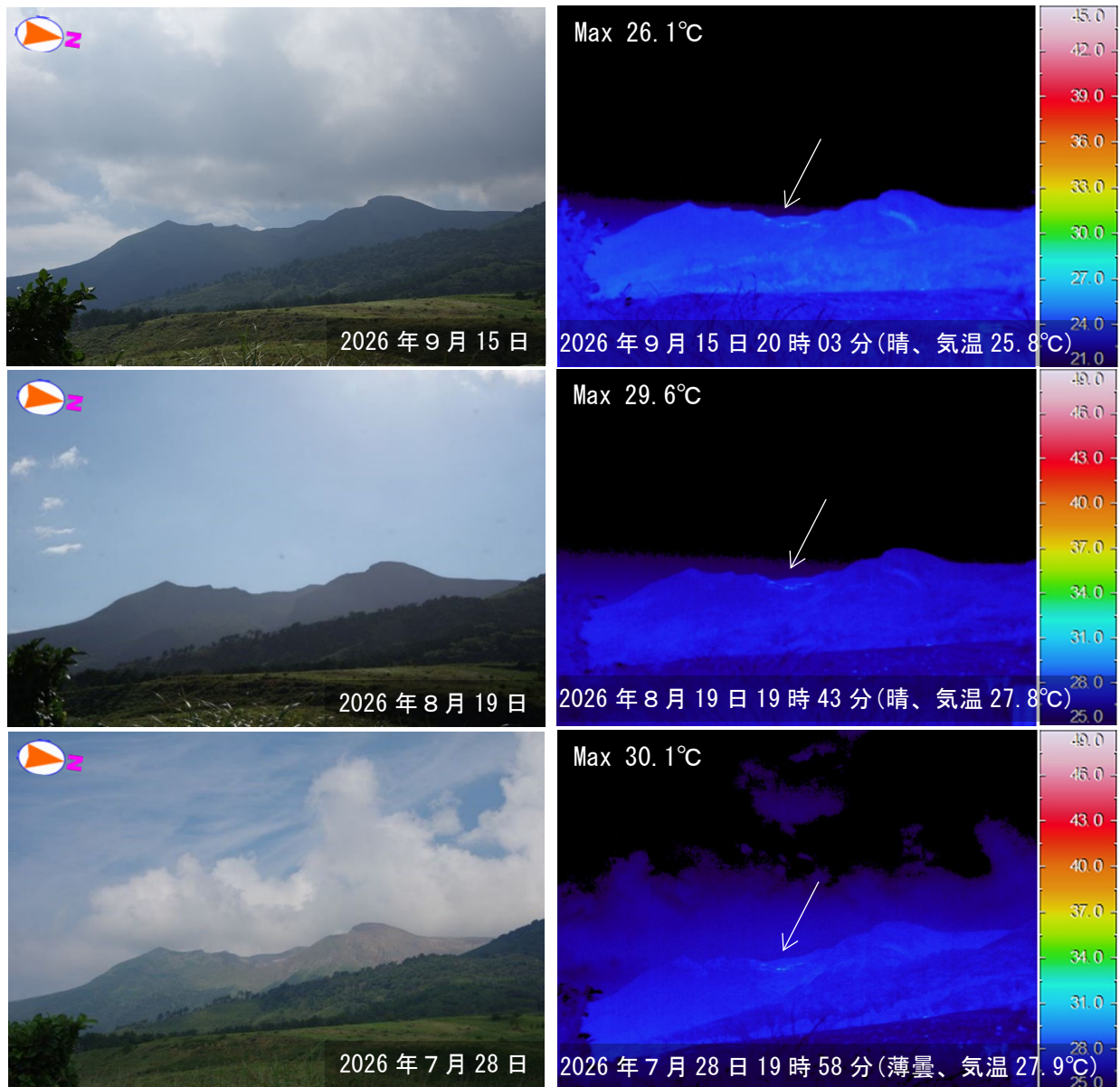


図2-2 口永良部島 古岳火口周辺の状況（湯向から観測）

8月及び9月に山麓で実施した現地調査では、古岳火口周辺で引き続き地熱域（白矢印）を確認しました。地熱域の分布や温度、及び噴煙の状況に特段の変化は認められませんでした。

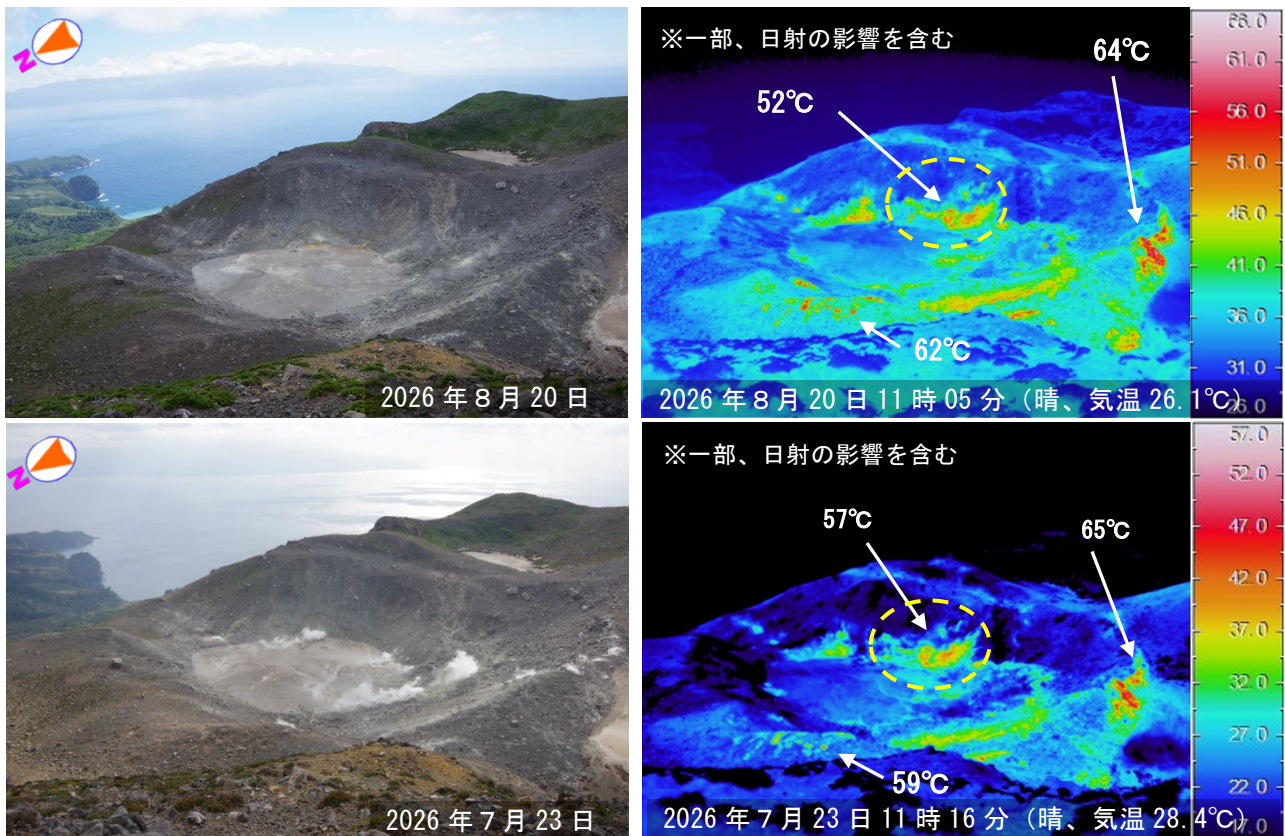


図2-3 口永良部島 古岳火口内の状況(古岳山頂から観測)

8月20日に山上で実施した現地調査では、古岳火口内及びその周辺で引き続き地熱域を確認しました。また、火口内に留まる程度の噴煙を観測しました。前回(7月23日)の観測時に地熱域のわずかな広がりを確認した火口底縁辺部(黄色破線内)を含め地熱域の分布や温度、及び噴煙活動に特段の変化は認められませんでした。

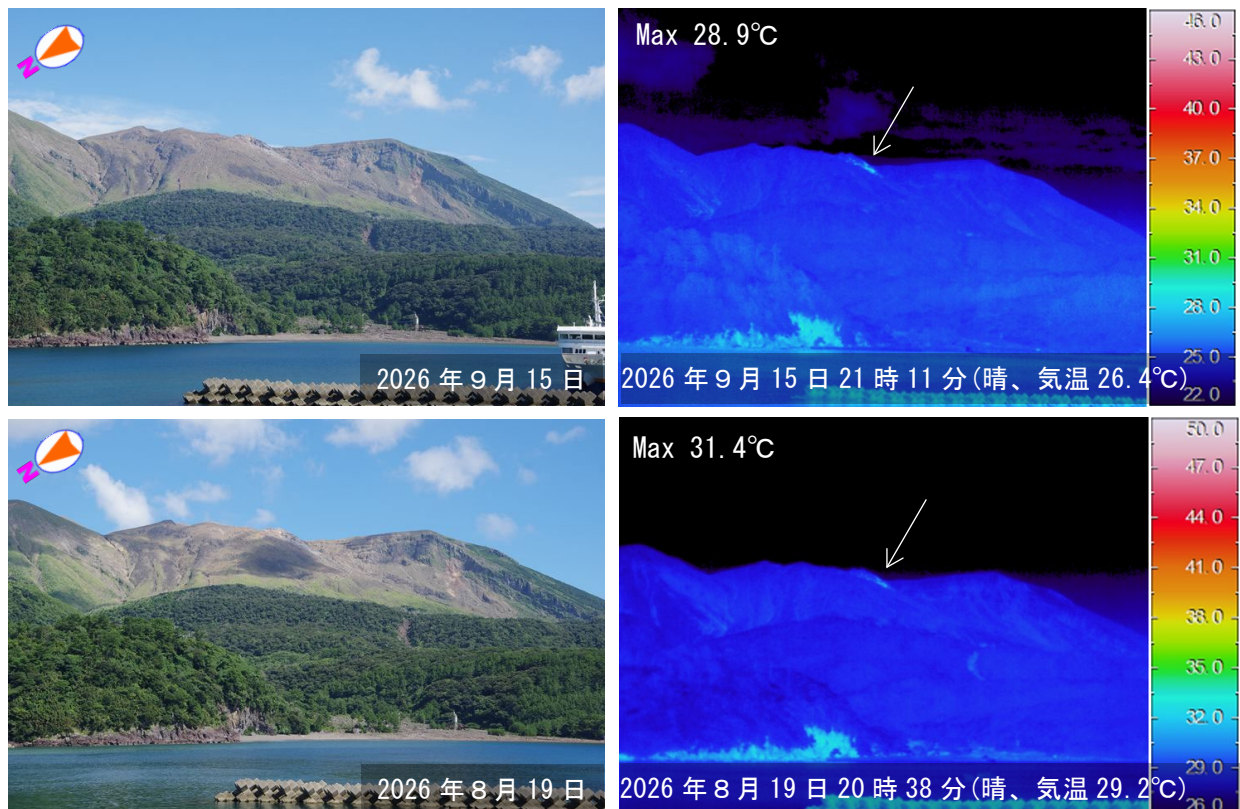


図2-4 (次ページに続く) 口永良部島 新岳火口及び新岳火口西側割れ目付近の状況(本村から観測)

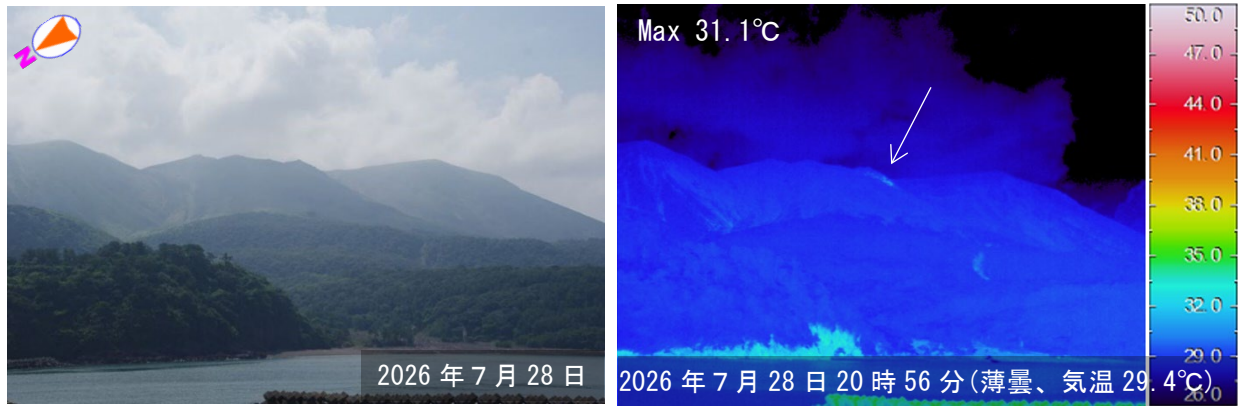


図 2-4 口永良部島 新岳火口及び新岳火口西側割れ目付近の状況（本村から観測）

8月及び9月に山麓で実施した現地調査では、新岳火口西側割れ目付近で引き続き地熱域（白矢印）を確認しました。地熱域の分布や温度、及び噴煙の状況に特段の変化は認められませんでした。

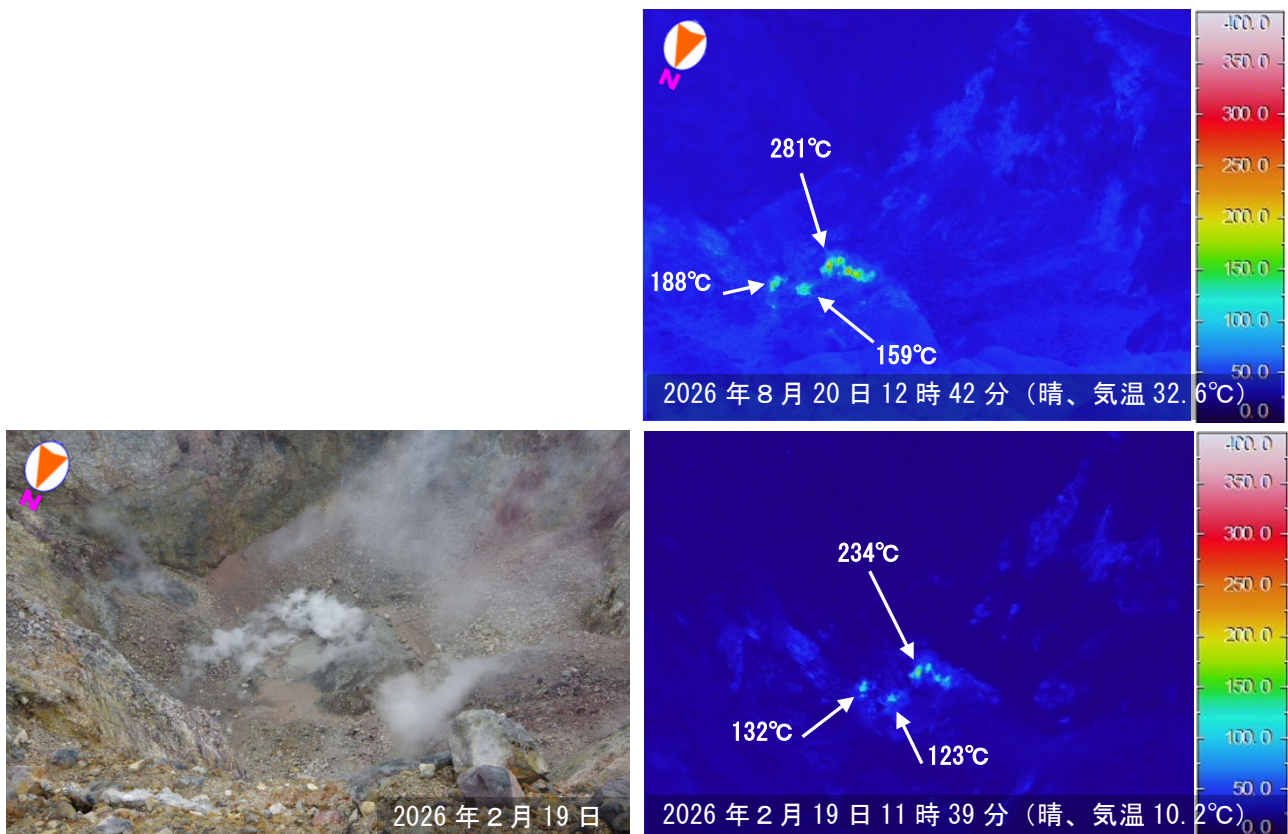


図 2-5 口永良部島 新岳火口内の状況（新岳北西側火口縁から観測）

8月20日に山上で実施した現地調査では、新岳火口内で引き続き地熱域を確認しました。また、火口内に留まる程度の噴煙を観測しました。地熱域の分布や温度、及び噴煙活動に特段の変化は認められませんでした。

※20日は機器障害のため、可視画像は取得できませんでした。

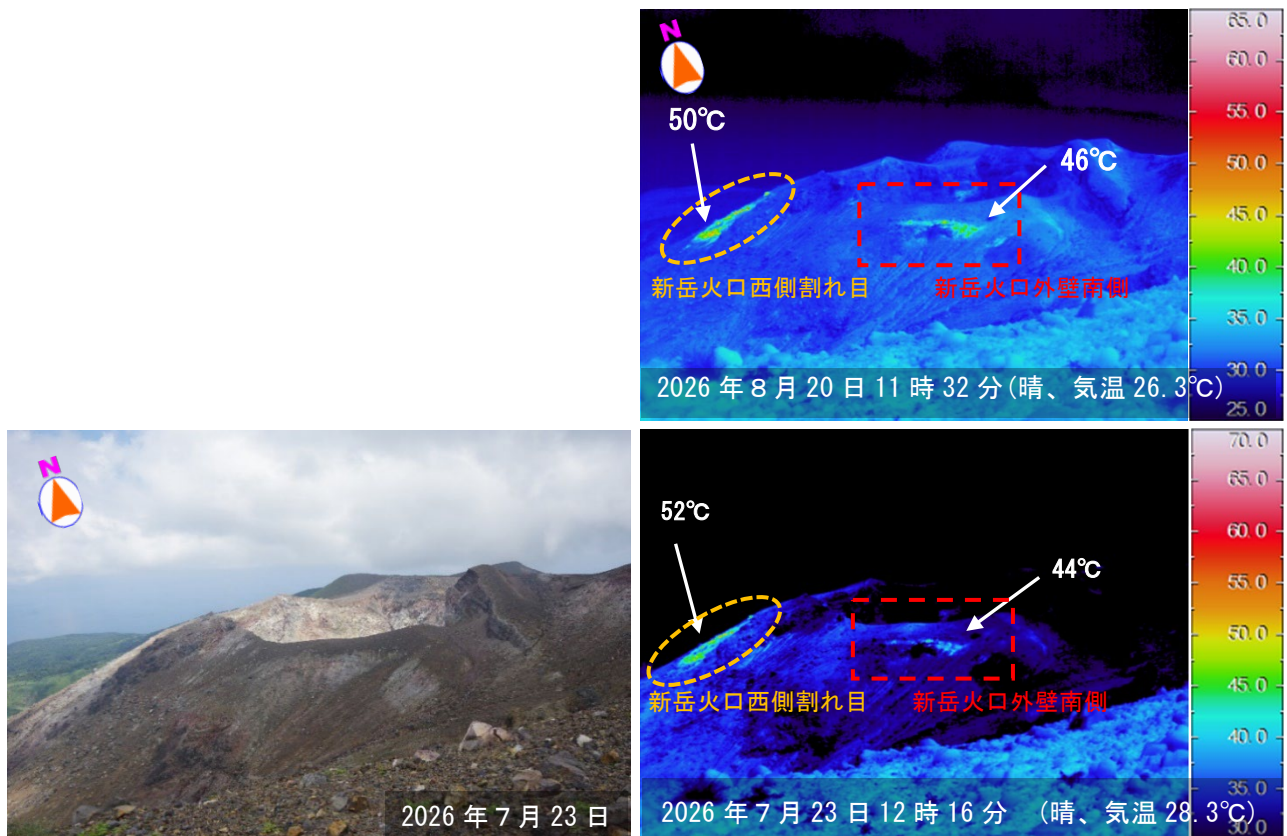


図 2-6 口永良部島 新岳火口外壁南側付近及び新岳火口西側割れ目付近の状況（古岳山頂付近から観測）

8月20日に山上で実施した現地調査では、新岳火口周辺で引き続き地熱域を確認しました。また、火口内に留まる程度の噴煙を観測しました。地熱域の分布や温度、及び噴煙活動に特段の変化は認められませんでした。

※20日は機器障害のため、可視画像は取得できませんでした。

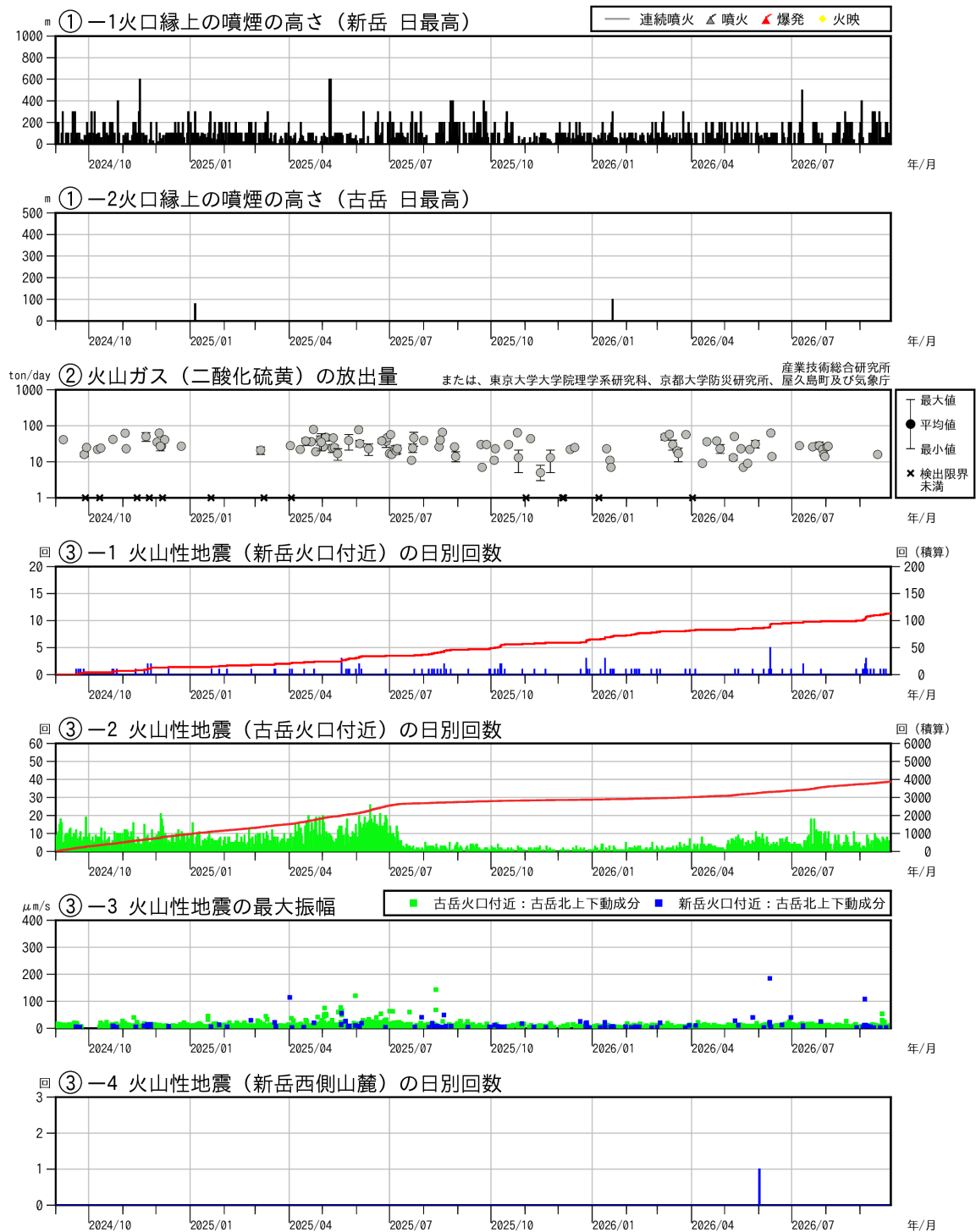


図3 口永良部島 最近の火山活動経過図（2024年9月～2026年9月28日09時までの速報値）

<2026年7月以降の概況>

- ・噴煙の状況に変化はなく、新岳火口では白色の噴煙が最高で火口縁上500mまで上がりました。古岳では、監視カメラで火口縁を越える噴煙は確認されませんでした。
- ・東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、屋久島町及び気象庁が実施した観測では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、1日あたり10～30トンと少ない状態でした。
- ・7月中旬頃から山体の浅いところで地震活動が活発化し、下旬には火山性地震が多い状態となりましたが、8月上旬頃に減少し、その後特段の増加は認められません。火山性地震は主に古岳火口付近の浅いところで発生しており、新岳火口付近においても時折発生しています。
- ・振幅の大きな火山性地震は発生していません。新岳西側山麓付近の火山性地震は観測されませんでした。

※③-3 古岳北観測点の障害のためデータが抜けている期間があります。

赤線は火山性地震の回数の積算（右軸）を示します。

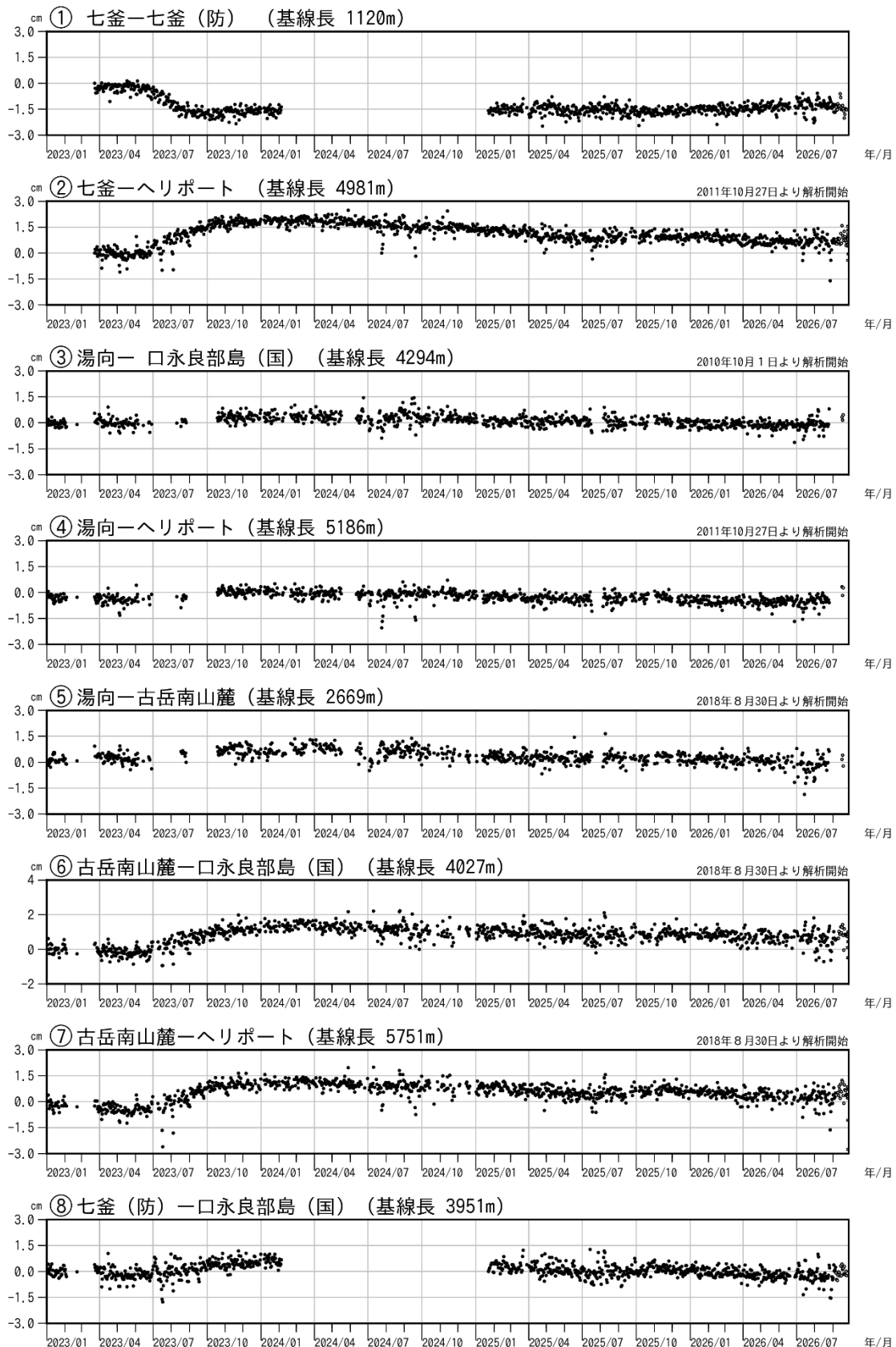


図4 口永良部島 GNSS 連続観測による基線長変化 (2023 年 1 月～2026 年 9 月 25 日)

GNSS 連続観測では、2023 年 11 月以降、火山活動に伴う特段の変化は認められません。

これらの基線は図5の①～⑧に対応しています。

基線の空白部分は欠測を示しています。

2023 年 3 月 23 日の観測点修繕工事 (七釜観測点) に伴うステップを補正しています。

直近の白丸は速報的な解析結果であり、再解析により修正されることがあります。

(国)：国土地理院、(防)：防災科学技術研究所

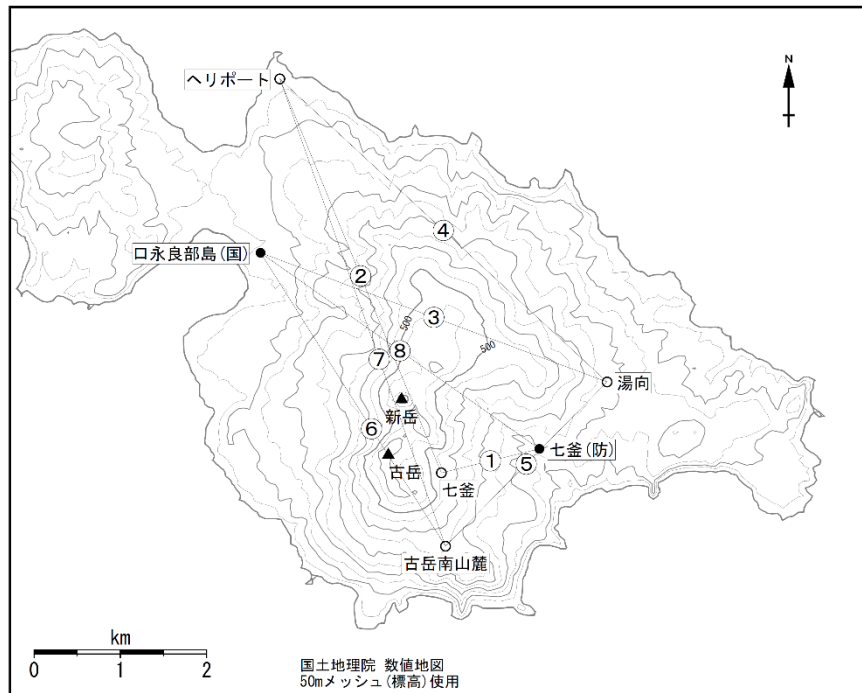


図5 口永良部島 GNSS 連続観測点と基線番号

小さな白丸 (○) は気象庁、小さな黒丸 (●) は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。

(国)：国土地理院、(防)：防災科学技術研究所

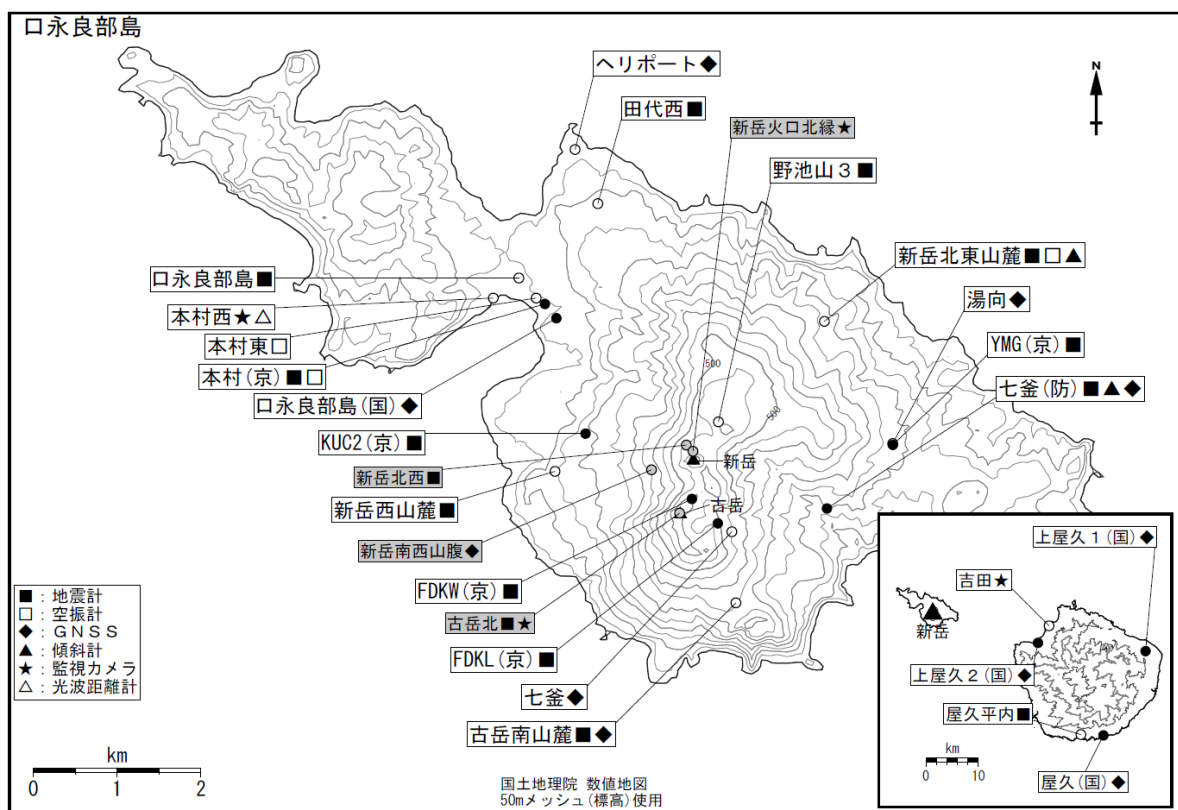


図6 口永良部島 観測点配置図

小さな白丸 (○) は気象庁、小さな黒丸 (●) は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。

(国)：国土地理院、(京)：京都大学、(防)：防災科学技術研究所

図中の灰色の観測点名は、噴火等により長期障害となっている観測点を示しています。